



はぐくみ

《学校教育目標》 ゆたかな心とたくましい体をもつ子どもの育成

立花北小 校長室だより

令和7年3月12日発行
No.9「つながることの大切さ」
発行者：校長 佐野 正信

3.11 東日本大震災から学んだこと

東日本大震災から14年が経ちました。あの日、東北から遠く離れた尼崎でも、ゆったりとした揺れが長く長く続きました。当時、市役所3階にあった教育委員会事務局で仕事をしていた私は、同僚の「気持ち悪い」「目が回っているような気がする」という呟きで、ようやく揺れに気づきました。確かに建物がゆったりと動いていました。間もなく棚に積み上げられた書類が崩れて床に落ちましたが、それでも気づいていない人は多くいました。過去に経験した阪神・淡路大震災（直下型）の揺れに比べて激しくはないものの、揺れている時間が非常に長く、嫌な予感がしました。これは、いわゆるプレート型の地震かもしれない。もしそうであれば、津波がやってくる。大変なことになるかもしれないと思いました。

「釜石の奇跡」という言葉をご存じでしょうか。津波による甚大な被害があった岩手県釜石市において、小中学生たちが日頃の防災教育の学びを生かし、見事に自分の命を守る行動をとることができたことから、そう呼ばれるようになりました。釜石の防災教育には、①想定にとらわれるな、②最善を尽くせ、③率先して逃げろ、の3つの教えがあります。震災後、釜石市の防災教育を指導されてきた片田敏孝先生（群馬大学名誉教授・東京大学総合防災情報研究センター特任教授）の研修に参加する機会をいただき、お話を伺うことができました。

東北地方には「津波てんでんこ」という教えがあり、もしもの時には家族を信じ、それぞれが自分の命を守って逃げるという約束です。しかし、津波注意報等が出て、人々が慣れてしまい、特にお年寄りには「どうせ逃げて津波は来ない。大きな防潮堤もできたから大丈夫」と避難しようとしませんでした。そこで、子どもたちがしっかりと防災を学び、震災に備えることを積み重ねていたところへ、あの日がやって来たのです。大きな揺れの直後、最初に動き出したのは、運動場で部活動をしていた釜石東中学校の生徒たちでした。率先して高台に向かって走り出したのです。その頃、近くの鶴住居小学校では、子どもたちが校舎の上階に向かって避難を始めていました。ところが、「逃げろ！津波が来るぞ！」と叫びながら小学校の前を走る中学生の姿を見て、校舎から降りて共に高台を目指すことにしました。



その後、小・中学生は、地域の方々と共に決められていた一時避難所の「ございしょの里」まで逃げました。しかし、「想定にとられない」という教えを思い出し、最後はさらに高い海拔44メートルの峠まで逃げたのです。その直後、津波が「ございしょの里」を飲み込んだという知らせが入りました。津波が引いた後、鶴住居小学校最上階の窓には、流された自動車が突き刺さっていました。もし、上階への避難にとどまっていたら、全児童と教職員は津波にのまれていたことから「奇跡」と呼ばれましたが、これは学びと訓練の賜物であると、今では誰も「奇跡」とは呼ばなくなったそうです。

尼崎の町は、外海（太平洋）には面していません。しかしながら、尼崎市立歴史博物館の資料等を見ると、過去に起きた大地震で尼崎は津波の大きな被害を受けています。立花北小学校でも、もしもの時に備えて、子どもたちと防災の学びを積み重ねていきたいと思えます。

地域行事でつながることの大切さ

立花北小学校の校区では、年間を通して、「盆踊り」「ラジオ体操」「餅つき大会」など、数々の地域行事が開催されています。これらの行事は、子どもたちのためであると同時に、実は非常に時に備えた地域のつながり作りを目的に考えられているというお話を地域の方々から伺いました。30年前の阪神・淡路大震災の時もそうでしたが、大きな災害が発生した時は、自分や家族だけで何とかできるものではありません。地域で助け合い、救助し合ったり、炊き出しを行ったりすることになります。その時になって「はじめまして」となるのではなく、日頃から協力してどこに何が保管されているのかを確認し、テントを立てたり、お米を炊いたりするための練習が「盆踊り」や「餅つき大会」などの地域行事なのだそうです。よく考えられていて、立花北小学校は素晴らしい地域に恵まれていることがよく分かりました。お忙しいとは思いますが、ぜひ生島西（上之島）や立花東（立花町）の地域行事に積極的に参加していただけたらと思います。

